

# 台所の結界はどうして破れたか

## 望月苑巳

時間には眠りという属性がない  
猥雑と孤独が

ただぶらんこのように  
うつうつつ 繰り返すだけの混沌。

トーストが一枚

鋭角な食欲を焼き上げる

妻は目玉焼きを食べながら夕暮れている

台所の結界を踏み越えられない定家卿は

怒ってトーストを投げつけた

シチューに紛れ込んだトマトが

シニカルな笑いを浮かべている

踏み越えられたら戦火は収まるのに

一将功なりて万骨枯る、というわけか。

すると妻が反撃を開始する

仰いで天に愧<sup>は</sup>じず、俯して地に炸<sup>は</sup>じず、でしよう。

たじろぐほどに定家卿は袋小路を曲がる

猥雑が背を向き

いつの間にか孤独が上りがまちに佇んでいる

慌てた定家卿は結界をこじあげ台所に辿り着く

台所は人生の縮図である。

人生はコップの中の水に似ている

「半分しかない」と悲しむ人もいれば

「半分もある」と喜ぶ人もいる

欲と正直のまぜあわせ

水がこぼれた時どう身を処するかで

その人の価値が決まるのだと

いつぞや法師は錫を突いて喝破したな。

定家卿はふてくされて

鍋からこぼれ出た妻を

抱えたまま走りだす

どこへ？　さらなる孤独へ？